

## 〈断絶〉を見据える「対話」

在日朝鮮人－日本人間の相互理解の不可能性を前提とした「共生」倫理

山口 健一  
(福山市立大学)

### 1. はじめに

#### 1-1. 在日朝鮮人－日本人間の共生の課題

近年、世代や国籍、ジェンダー、経済階層、生活する地域、所属する民族組織などの要素が絡み合いながら、現代日本社会の中でディアスポラに位置する在日朝鮮人の多様化が進んでいる<sup>1)</sup>。一方概して日本社会の多数派をなす日本人は、在日朝鮮人が抱える諸問題に無関心なままである。その理由の1つには、例えば朝鮮民主主義人民共和国(以下共和国と表記)の拉致問題や核兵器開発、大韓民国(以下韓国と表記)における従軍慰安婦像設置といった東アジアの国際情勢によって生じた、在日朝鮮人－日本人間の相互理解の断絶が挙げられよう。こうした中われわれは、いかに両者が互いを承認し合い共に生きる関係を築きあげればよいのだろうか。

本稿の課題は、その問いに答える(と筆者が考える)実践の特殊な一形態を、在日朝鮮人と日本人が「対話」を行う「パラムせんだい」(以下パラムとも表記)の事例に着目して描写することにある。この事例は、これまで徐(2003)においてその実践が紹介され、山口(2008b, 2011, 2012, 2013)により考察されてきた。しかしそれらは、「対話」がどのように先述した両者の相互理解の断絶に対処するのか、を検討してこなかった。そこで本稿は具体的に、断絶の中での「対話」の重要性、「対話」実践においてメンバーが断絶を自覚する契機、断絶を見据える「対話」を通じて生じる規範やメンバーの価値観の変化に着目して事例を描写する。最後に、本事例の特殊な「対話」形態と「共生」の倫理を述べよう。

#### 1-2. 調査の視角と方法

パラムせんだいは、明確な組織形態をもたない集団である(山口 2008b)。そのような集団の描写には、人びとの意味と相互行為に着目するシンボリック相互行為論が有用である。本稿は中でも A. ストラウスの視角と方法を用いる。

ストラウスの視角は、人びとの相互行為において表象される多様な社会的世界を分析の俎上に載せる。社会的世界とは、相互行為において何らかのシンボルが「共有」された範囲であり、そのシンボルを用いた共同的活動が行われる範囲である。社会的世界は、そのメンバーたちによる集合的定義のプロセスにおける他の諸世界との差異化を通じて、その正当性が主張される。社会的世界は、メンバーたちがさまざまなシンボルを持ち寄ることによって構成される象徴的世界に覆われている。象徴的世界は、社会的世界の活動に、(これ以上問われることがないという意味で)究極的な理由ないし根拠を与えるものである。社会的世界の活動には、他世界との差異化や象徴的世界との関連で、(規範や重要性といった)価値と(実践形式や理念などの)標準が形成される(山口 2008a)。

また本稿は、質的調査法としてストラウスらが提唱したグラウンデッド・セオリー法(Strauss and Corbin 1998=2004, 2008=2012)を採用するが、事例報告に適するよう修正を加えている。第一に本研究は、在日朝鮮人－日本人という異民族間の相互承認の具体的領域理論の構築を志向しているが、本稿の課題はパラムの事例における「対話」実践の形態を描写することにある。第二に本研究における理論的飽和は、パラムの事例の範囲内に限定されている(山口 2012, 2013)。本稿はその理論的飽和に至る途上の事例報告である。この限りにおいて本稿は以下の方法と手順をとった。①本稿で扱うデータは、メンバーへのインタビュー(15回実施)と『パラムせんだい通信』(内部者向けの連絡誌)、そして参加観察において筆者が記したフィールドノート(2003年6月－2008年3月)である<sup>2)</sup>。これまで筆者は②これらのデータをオープンコード化し、中核カテゴリーを「対話」とする(山口 2008b)とともに、他の諸カテゴリーとの理論的関連づけ(山口 2008b, 2011, 2012, 2013)を行ってきた。本稿はそれらの知見に依拠しつつ、③パラムを覆う象徴的世界と「対話」の重要性の関連について、在日朝鮮人－日本人間のコミュニケーションの観点から理論的サンプリ

表1 パラムせんだいメンバー一覧

表記	民族性・世代	性別	年齢 (2008年時)
A	在日朝鮮人2世	女性	70歳代
B	日本人	男性	30歳代
C	日本人	男性	40歳代
D	日本人	女性	40歳代
E	日本人	男性	70歳代
F	日本人	男性	50歳代
G	日本人	女性	20歳代
H	日本人	女性	40歳代
I	在日朝鮮人2世	男性	40歳代
J	韓国人	女性	20歳代
K	日本人	女性	40歳代
L	在日朝鮮人3世	男性	30歳代
M	在日朝鮮人3世	男性	30歳代
N	日本人	男性	40歳代
O	日本人	女性	40歳代
P	日本人	男性	不明
Q	日本人	女性	30歳代
R	在日朝鮮人1世	男性	80歳代
S	在日朝鮮人2世	男性	50歳代
T	在日朝鮮人	女性	40歳代
U	在日朝鮮人	男性	50歳代
V	在日朝鮮人2世	女性	50歳代
W	日本人	男性	60歳代
X	日本人	女性	60歳代
Y	在日朝鮮人3世	女性	30歳代
Z	日本人	男性	20歳代
HA	在日朝鮮人1世	男性	80歳代
HR	日本人	女性	40歳代
KK	在日朝鮮人3世	男性	10歳代
MX	日本人	女性	不明
ST	日本人	女性	20歳代
IT	日本人	男性	30歳代
KM	日本人	女性	不明
MH	日本人	男性	不明

ングを行った。④データから浮上した重要な概念は〈〉で括って表記した。⑤本稿の内容についてメンバーによる確認を行った。

要するに本稿は、上述した限りでグランデッド・セオリー法に準拠し、パラムの事例を社会的世界、〈現代日本社会〉を象徴的世界と捉えた上で、それらの中で実践される在日朝鮮人-日本人間の「対話」の価値や標準を検討するものである。

## 2. パラムせんだいの「対話」と〈現代日本社会〉

### 2-1. パラムせんだいの概要

最初に簡単にパラムの概要とこれまでの研究上の知見を述べておきたい。パラムせんだいは、1998年に宮城

県仙台市で設立された、在日朝鮮人が抱える諸論題について在日朝鮮人と日本人が「対話」<sup>3)</sup>を実践する市民活動団体である。2010年10月から休会し、その後、メンバーが入れ替わりつつ再開された(現在の存続の有無は不明)。「パラム」とは朝鮮語で「風」を意味する。「対話」では、在日朝鮮人の国籍や無年金問題、被差別体験、帰化、民族名と日本名の使用、外国人登録証、あるいは在日朝鮮人と日本人の歴史認識の違いや共生社会への展望と課題といった論題が取りあげられてきた。パラムは「集い」<sup>4)</sup>(「対話」を実践する定期・不定期の集まり)や聞き取り調査や映画上映会といった諸活動への参加が自由であると設定され、また会費や事務局等も設定されていない。パラムは誰でも参加できる「任意の、自発の、ボランティアなグループ」(B、2004年8月5日、集い)<sup>5)</sup>である。登録上は70-100名程度のメンバーがいるものの、実際に頻繁に参加するメンバーは15名程度の小規模な集団である。

### 2-2. パラムを覆う〈現代日本社会〉とそのコミュニケーション構造

パラムのメンバーによって語られる〈現代日本社会〉(日本社会、在日朝鮮人社会、パラムと無関連な諸世界を合わせたカテゴリー)は、次のようなものであった。日本社会は日本が戦争する国へと逆戻りする「右傾化」が進んでいた。日本社会の人びとは政治的論題を忌避する傾向があり、加えて在日朝鮮人についてあまり知らなかった。それゆえその人びとは、マスメディアによる北朝鮮報道を受けて在日朝鮮人と共和国とを同一視するといった、在日朝鮮人へのステレオタイプを保持する「刷り込み」を有していた。在日朝鮮人社会の人びとは、日本社会の内部にあるためその影響を強く受けていた。若い世代の人びとは、在日朝鮮人の歴史を知らず、政治的論題を忌避する日本社会の人びとに含まれていた。またマスメディアによる北朝鮮報道を受けて、在日朝鮮人と日本人の人びとの間に距離が生じた。さらに、パラムと無関連な諸世界に目を向けると、民団や総連といった民族団体や企業といった「組織」では、上司と部下のような非対称な立場に基づくコミュニケーション様式があった。またそのコミュニケーション様式では、「組織」全体の意向によって個人の意見が統制されていた。他の市民活動団体や身のまわりの友好関係でも、相手の意見と異なる個人的な意見を主張することが相手の人格の否定や攻撃につながるコミュニケーション様式があった(山口2013)。

こうした〈現代日本社会〉には、①在日朝鮮人と共和国を同一視するマスメディア報道の影響、②ステレオタイプや「刷り込み」を有する日本人の在日朝鮮人に対する無知、③第二次世界大戦時から続く「刷り込み」による在日朝鮮人差別の構造、④在日朝鮮人－日本人間の対面的なコミュニケーション経路<sup>6)</sup>の消失、⑤その経路が形成された場合における相互理解の〈断絶〉から構成されるコミュニケーション構造があった。それらの諸要素は互いに補完し合い強化する循環構造をなしており、人びとが個人ではなく民族(という属性)を代表する〈集合的アイデンティティの全体表象〉によって形成されていた(山口 2012)。

### 2-3. パラムの「対話」理念と実践形式

このような特徴をもつ〈現代日本社会〉の中、パラムは「対話」を実践する。その「対話」理念は、在日朝鮮人と日本人のメンバーが、在日朝鮮人に関する諸論題について、個々の経験に基づく自らの意見を互いに語り学習することである。「対話」を遂行する際には、「違いを認めること」「はっきりいうこと」という下位理念が設定されていた。なぜならメンバーたちは、〈現代日本社会〉に生きている以上、日常生活においてそのコミュニケーション様式を採用していたからだ。そのときメンバーたちは、〈自分の意見の語りづらさ〉や〈在日朝鮮人に関する論題の語れなさ〉の感覚を抱えていた。それらの下位理念の設定により、メンバーたちは自らの意見を語り多様な意見を学ぶことができた。また「対話」は、〈現代日本社会〉のコミュニケーション様式を持ち込むメンバーたちが互いのコミュニケーション経路を消失しないために、〈個人間の親密なつながり〉を紐帯として実践された。「対話」実践は、互いに民族を代表せず個人として語る〈個人表象〉という形式で行われた。それにより①〈集合的アイデンティティの全体表象〉の一種である〈ステレオタイプの戦争加害者－被害者関係〉を避けることができ、②在日朝鮮人個々人の多様な歴史の学習を通じて在日朝鮮人へのステレオタイプを解体することができ、③その結果在日朝鮮人に対する「差別」が生じる危険性を減少させることができた(山口 2008b, 2011, 2013)。

以上を踏まえ、パラムの「対話」の重要性を〈断絶〉に着目してみていきたい。

## 3. 〈断絶〉に対する「対話」の重要性

### 3-1. 在日朝鮮人－日本人間のコミュニケーションの2つの〈断絶〉

パラム覆う〈現代日本社会〉には、在日朝鮮人－日本人間のコミュニケーション構造(山口 2012)における2つの〈断絶〉が伏在していた。

1つは、在日朝鮮人社会の人びとが〈現代日本社会〉に生きる日本人に対して形成するコミュニケーション経路の〈断絶〉である。在日朝鮮人のTさん、ある日本人(記入者不明)は次のように述べる。

簡単には括れないんだけど、まず日本人と一緒にいるっていう現状があり、過去の事があって、在日〔朝鮮人たち〕はどうしてほしいのっていうのが見えてこない。……日本人に何をさせたいのか分からないまま、在日〔朝鮮人たち〕の中だけで言っても進まないですよ。日本人は何も分かっていないと思う(T、『通信』7号、2000年9月1日)。

在日コリアン(朝鮮人)からの声が聞こえていないのには理由もあると思いますが、〔日本人の〕我々も声の聞こえるところまで行くことを惜しんでいたのかもしれない(記入者不明、『通信』12号、2002年8月4日)。

Tさんは、自らの経験から、在日朝鮮人たちが自らの境遇や歴史について日本人に理解してほしい内容を明確にしないまま、在日朝鮮人社会内部で意見を述べ合う傾向を指摘する。ある日本人は、〈現代日本社会〉に生きる日本人が、在日朝鮮人が自らの境遇や歴史について話せる機会を提供せず、在日朝鮮人から話し出すことが困難な理由についても詳しく知らない点を指摘する。このことは、在日朝鮮人の境遇や歴史の諸論題についての、在日朝鮮人－日本人間のコミュニケーション経路の〈断絶〉を表している。そしてこの背後には、〈刷り込み〉により在日朝鮮人と日本人の間に〈被差別者－差別者関係〉が頻繁に生起する〈現代日本社会〉のコミュニケーション構造(山口 2012)があり、それが経路の〈断絶〉を強化したと考えられる。

もう1つは、在日朝鮮人の境遇や歴史の諸論題についての在日朝鮮人－日本人間のコミュニケーション経路が形成された場合に顕れる〈断絶〉である。この点につい

て韓国人のJさんと日本人のCさんという。

〔「対話」において〕自分の帰属意識や価値観を話すことは悪いことではありません。しかしその言葉に偏見や差別意識が含まれると、スティグマを持つ人はその言葉で傷つき、素直な自分を失いかねないということがあります。しかし他者のスティグマを知る方法がないことも事実です。その人が話してくれないと誰も分かりません (J、『通信』4号、1999年9月)。

〔「対話」において〕質問は難しい。ポジティブなことを聞こうとすると、まるで傷の深さを分かっていないようだし、かといってつらかったことや苦しかったことを聞けば、傷を逆なでするような気がしてしまう (C、『通信』17号、2007年1月20日)。

両者がここで述べているのは、パラムの「対話」実践のように、在日朝鮮人の境遇や歴史の諸論題について在日朝鮮人と日本人が互いに語り合う場面を自覚的に設定した場合においても、互いの相互承認が困難な点である。Jさんは、在日朝鮮人メンバーが、自らの経験に基づいて意見を話すとき、それに対する相手の評価に〈現代日本社会〉に蔓延するステレオタイプや差別が含まれていると、そのメンバーの個人的アイデンティティが貶められる点を指摘する。またJさんは、在日朝鮮人メンバーが有するスティグマ (アイデンティティの負の烙印) を相手が事前に知らないため——そのメンバーがそれを表明しない限り——相互承認の失敗の契機がコミュニケーションに伏在する点を指摘する。このことは、スティグマを有していない日本人のCさんの、在日朝鮮人メンバーに対する「質問は難しい」という文章にも表れている。この相互承認の〈断絶〉は、「対話」を実践してきたメンバーたちが自覚したものであることから、在日朝鮮人-日本人間のコミュニケーション経路に常に伏在していたと考えられる。

### 3-2. 「対話」の重要性

この2つの〈断絶〉は、Tさんがそれを「埋めるような話し合いと交流をしてほしい」(T、『通信』7号、2000年9月1日)と述べるように、パラムが「対話」実践を進める中で乗り越えるべき克服対象であった。この点から言えば、「対話」実践の狙いとは、在日朝鮮人-日本人間のコミュニケーション経路を形成し、その中で両者が

相互承認へと至ることと言い換えられる。そうすると、これまでみてきた「対話」の重要性を、相互承認、知識の獲得、公共圏、ケアの4点にまとめ直すことができる。

パラムの「対話」実践は、2つの〈断絶〉を乗り越えるために、〈個人間の親密なつながり〉を紐帯としそれゆえ互いに〈個人を表象〉するコミュニケーション様式をとる(山口2011, 2013)。その点についてAさんは端的に述べる。

お互いが受け入れる意思と用意がなされていなければ対話は成立しない。そしてそれ [= 対話] は信頼と友情へと深まっていく (A、『通信』8号、2001年2月1日)。

Aさんの記述は「対話」が、〈現代日本社会〉の在日朝鮮人-日本人間のコミュニケーション様式(山口2012)を採用せず、また〈現代日本社会〉に蔓延するステレオタイプを安易に当てはめずに、在日朝鮮人と日本人が話し合う実践であることを示している。またこの記述は、「対話」はステレオタイプを当てはめる〈集合的アイデンティティの全体表象〉ではなく〈個人を表象〉する実践であるがゆえに、両者の間に〈個人間の親密なつながり〉が醸成されていくことを示している。そのため結果として、「対話」は——Aさんが「信頼と友情」と述べるような——在日朝鮮人や日本人という集合的アイデンティティを含めた個人的アイデンティティを双方が認め合う相互承認関係を形成していくものであった。

また「対話」は、「違いを認めること」「はっきりいうこと」という遂行上の理念が掲げられた、個々人の経験に基づく互いの意見を学びあう営みでもあった(山口2008b)。この点についてOさんは次のように述べる。

互いの歴史を知り、違いを認めて謙虚な態度で話を聞くことから。対話が大事！(O、『通信』18号、2009年2月)。

この記述から「対話」実践には、在日朝鮮人と日本人のメンバーによる、個々人の歴史の知識の獲得という重要な狙いがあることがわかる。その営みは、メンバーたちに〈現代日本社会〉に流布する在日朝鮮人のステレオタイプを解体し、ステレオタイプに基づく在日朝鮮人への差別や蔑視を抑制する効果を有していた(山口2011)。また互いに「違いを認めて謙虚な態度」という記述から、「対話」には、在日朝鮮人と日本人の個々人による対等な

関係の形成という志向性・規範があることがわかる。

しかしながら、「対話」実践を通じた知識の獲得による在日朝鮮人への差別や蔑視の抑制は、その範囲がパラムの事例に限定されているため、〈現代日本社会〉全体のコミュニケーション構造を解体するほどの変革力を持っていなかった。この点についてJさんは、「〔〈現代日本社会〉のらびとの〕社会的意識が一度に変わることはないにしても、在日〔朝鮮人〕が在日〔朝鮮人〕であると……言えるようになるというような土俵作り……の努力は必要だ」(J、『通信』4号、1999年9月)と述べる。すなわちパラムの「対話」実践は、それがたとえ〈現代日本社会〉全体からみて「焼石に水」であったとしても、在日朝鮮人の抱える諸論題について、在日朝鮮人が「在日朝鮮人の自己」を表象して日本人とコミュニケーションを行う公共圏(山口2013)としての重要性を有している。

ここで注意してほしいのは、在日朝鮮人メンバーが「在日朝鮮人の自己」を表象すると、〈現代日本社会〉の中で被りうる蔑視や差別による〈傷つきやすい自己〉を顕在化させる点である。そのため「対話」には、〈現代日本社会〉や過去の経験に対する在日朝鮮人メンバーの〈傷つきやすい自己〉に伴う感情が表出されていた。この点について次のやり取りがなされる。

Z: パラムは感情を表に出していい会だと思う。

A: そうそう。そうじゃないと日本と朝鮮の関係は扱えない。

S: Aさんは感情を出して意見をいう人。

E: そうそう。それがいいんですね(2007年1月20日、集い)。

このやり取りから分かるのは、在日朝鮮人の境遇や歴史についての諸論題(それは自ずと日本や日本人との関係を含む)について「対話」を行うとき、メンバーに何らかの感情が生起しうる点である。ただしそれは、Aさんのような在日朝鮮人メンバーだけではなく——例えば「泣いて謝った」日本人にも感情が表出される(山口2013)ように——パラムの「対話」の参加者全体にも及んでいた。なぜなら後述するように、あるメンバーの感情の表出はまた別のメンバーの感情を表出させるからである。

加えてこの感情の表出を伴う「対話」実践は、一部のメンバーから見ると、日本人による在日朝鮮人一世への「癒し」の効果をもつと捉えられていた。Dさんは次のようにいう。

在日朝鮮人一世の方々への癒し。仮にも日本人〔メンバー〕が、〔日本〕政府ではないけれども、聞くことによってちょっとでも在日朝鮮人一世の方々的人生を肯定することになるんじゃないかなー。……〔パラムには〕日本人で聞ける人がいるんだよって。なんか、ちょっとでもあったかさが、交流を感じてくれたらいいのかな(D、2005年4月28日、集い)。

Dさんの語りはパラムの「対話」が、日本人メンバーが在日朝鮮人メンバーの経験談を聞くことにより、在日朝鮮人メンバーをその経験を含めた個人的アイデンティティを「唯一の人格」として承認する、ケア活動の側面を有することを指摘している。〈現代日本社会〉では、在日朝鮮人へのステレオタイプに基づく蔑視や差別が生じるため、〈在日朝鮮人としての自己〉の承認が困難であった。また、日本政府が在日朝鮮人の境遇改善や歴史認識について否定的ないし消極的な対応をとってきた中で「対話」は、日本人メンバーが在日朝鮮人メンバーの自己を肯定し承認することを通じて、在日朝鮮人メンバーの〈傷つきやすい自己〉を癒す営みでもあった。

では次に、〈現代日本社会〉の在日朝鮮人-日本人間のコミュニケーション構造における2つの〈断絶〉の中、パラムの「対話」実践においていかに〈断絶〉が顕れメンバーに自覚されるのかを見ていこう。

#### 4. 「対話」における〈断絶の自覚〉の契機

##### 4-1. 感情の表出による〈断絶〉の顕在化

パラムの「対話」実践では、在日朝鮮人社会のらびとの感情の表出が契機となって〈断絶〉が顕在化していた。パラムにおいて、感情の表出は特に在日朝鮮人メンバーのAさんの言動にみられた。それはAさんがパラムせんだいの設立者の一人である(山口2008b)と同時に、メンバー間の〈個人間の親密なつながり〉の中心に位置している(山口2013)ことから、在日朝鮮人と日本人との「対話」がよく実践されてきたからだと考えられる。

最初に取りあげるのは、〈現代日本社会〉の評価に伴う感情の表出による〈断絶〉の顕在化である。Aさんはいう。

拉致問題によって在日〔朝鮮人〕の人たちがもう嫌だって落ち込んでいる。〔徐々に語気を強め口調を早めながら〕なんで〔意見を〕ぶちまけないの? パラムせんだいがいくら小さな組織だって、みんなが

いろいろ在日の問題を考えて、みんななんだかんだで関わっているのにー (A、2004年8月5日、集い)。

このAさんの語りは、〈現代日本社会〉におけるテレビなどのマスメディアによる北朝鮮の拉致問題報道により、在日朝鮮人たちが自らの境遇や歴史の諸論題について日本人と意見を語りあうことを避ける傾向を指摘している。そのとき在日朝鮮人たちに「落ち込み」という感情の表出が伴っていた。これに対しAさんは、パラムさんだいの活動と比較しつつ、在日朝鮮人社会の「落ち込んだ」人びとに苛立ちと嘆きの感情を表出している。

パラムの「対話」実践では、在日朝鮮人メンバーの感情の表出が日本人メンバーの感情の表出を継起させていた。そのとき両者の間に〈断絶〉が顕在化した。上述のAさんの語りについて、Aさん、Cさん、Zさんの間で次のやり取りがなされる。

Z：[Aさんの〈現代日本社会〉に対する苛立ちと嘆きに少し苛立ちながら] おっしゃることはもともとだと思んですが、それを指摘してどうしたいんですか。

A：私、はっきりいうけど、[日本人の] BさんやCさんやZ君とは違うけど、[在日朝鮮人の] 私が感じるものが違うの。ものすごいプレッシャーなの。[語気を強め] なんてって。[苛立ちと嘆きを混ぜながら] 一回日本が沈没して何か起きないとわかんないのよ。

C：[Zさんをなぐさめるように] Z君、[パラムと一緒に] やっていきこうね (2005年9月10日、集い)。

このやり取りでは、Zさんが「おっしゃることはもともと」と同意しつつ、Aさんの〈現代日本社会〉に対する感情の表出に対して、苛立ちという感情の表出とともにAさんに語り返したとき、Aさんは在日朝鮮人と日本人との間にある〈断絶〉を強調している。そこから、〈断絶〉には表出する感情の質と大きさの相違が含まれる点が見えてくるだろう。その感情の質と大きさの〈断絶〉のゆえに、日本人のCさんは同じ日本人のZさんに慰めの言葉をかけたと考えられる。

加えて感情の表出は、〈現代日本社会〉の評価に対してだけでなく〈在日朝鮮人としての自己〉に対しても生じており、それも〈断絶〉を顕在化させていた。Aさんは述べる。

ふるさとに帰りたい。ふるさとして何ですか。ふるさとが私をやさしくしてくれるのでしょうか。父であり、母であり、きょうだいでしょうか。もう誰もいない。淋しさだけ、ただ一人 (A、『通信』18号、2009年2月)。

この記述は、ディアスポラの状況にあるAさんの〈在日朝鮮人としての自己〉を表している。在日朝鮮人2世のAさんにとって、日本や朝鮮半島の諸社会は「ふるさと」に明確に当てはまるものではなかった。あるいは日本や朝鮮半島に離散した父や母や兄弟姉妹の家族を「ふるさと」と捉えた場合であっても、高齢のAさんには、それらはもはや存在しなかった(ただしAさんの子孫は日本で生活している)。Aさんは、故郷喪失を伴う〈在日朝鮮人としての自己〉を振り返るとき、「淋しさ」という感情を表出していた。

在日朝鮮人メンバーのAさんが表出する「淋しさ」の感情は、パラムのメンバーを含めた〈現代日本社会〉に生きる人びととの間に、〈断絶〉を顕在化させていた。日本人メンバーのHさんとAさんとの間で次のやり取りがなされる。

H：Aさんは、淋しい、淋しいっていうけど。ほらサポセン [=パラムの「集い」が開催される仙台市民活動サポートセンター] でいろんな人たちに会ったりすると、「Aさん、Aさん」って話しかけられる。

A：……でも、だから淋しくないというわけじゃないの。……うーん。そうやって日本でいろんな人たちと出会うけど、やっぱりどこかに一線がある (2007年8月4日、集い)。

このやりとりから、Aさんには〈現代日本社会〉に多くの友人や知人がいることがうかがえる。日本人のHさんが、Aさんは「淋しさ」を表出するにもかかわらず、たくさんの人びとに知られ交友関係があるという矛盾を指摘すると、在日朝鮮人のAさんは「一線」という〈現代日本社会〉の人びととの〈断絶〉を指摘した。これは、在日朝鮮人と日本人を含む〈現代日本社会〉の人びとの間にコミュニケーション経路が形成されていたとしても、そこに〈断絶〉が伏在する点を意味している。それは、「淋しさ」という感情の表出によって顕在化していた。

#### 4-2. 〈断絶の自覚〉

このような「対話」における、あるいはそれを通じた、在日朝鮮人メンバーの感情の表出に伴う〈断絶〉の顕在化は、日本人メンバーに〈断絶の自覚〉を生み出していた。筆者の参加観察の経験からいうと、この点は何人かの日本人メンバーにも当てはまると思われるが、そのプロセスを言葉にすることが困難なことから、詳しい説明や表現はCさんを除きほとんど見られなかった。Cさんは、「パラムせんだい」が実施した在日朝鮮人一世の生活史の聞き取り調査——パラムのメンバーはそれを在日朝鮮人一世との「対話」実践と捉える——の経験について、次のように述べる。

聞き取りに参加した在日〔朝鮮人〕の仲間〔＝Aさん〕が、冷静さを失うように感情も露わな共感と反発を示している時も、比較的冷静でいてしまえる自分を発見したからです。現に聞き取りの過程で、思いがこみ上げてきた在日〔朝鮮人〕の仲間に「どうしようもなく断絶しているのよ。」と何度か感情的＝精神的に言われました（C、『通信』17号、2007年1月20日）。

Cさんは、在日朝鮮人のAさんが聞き取り対象者の在日朝鮮人一世の意見や経験談に対して「感情も露わな共感や反発」を示すのに対し、自分が冷静であるという相違に気がついた。また、そうした感情を表出した出来事に対するAさんの「断絶している」という複数回の発言は、「対話」実践における在日朝鮮人－日本人間の〈断絶〉がメンバーにとって明示的であることも意味している。

この〈断絶の自覚〉は、翻って日本人メンバーに自らの境遇や歴史を理解させることを促した。Cさんは述べる。

聞き取り調査が始まった瞬間から、聞き取る側であるメンバー内でのそれぞれの生い立ちや認識の違いが、対象者を前にして大きく浮彫されました。在日〔朝鮮人〕一世……の皆様を鏡として、メンバー一人一人のアイデンティティを問い直すとともに、決して単純化してはならない複雑な日本社会の縮図のようなものを見たように思います（C、『通信』16号、2006年2月）。

この記述が示すのは、聞き取り調査や「対話」を通じ

て、日本人メンバーが在日朝鮮人メンバーとの間にある〈断絶を自覚〉した点である。その自覚は、聞き取り対象者の在日朝鮮人一世の意見と経験談を参照点にして、それぞれのメンバーの個人的アイデンティティの成り立ちを振り返らせた。その結果、その自覚は——Cさんが「単純化してはならない複雑な日本社会の縮図」と述べるような——在日朝鮮人メンバーと日本人メンバーの境遇と歴史が交錯する〈個人間の親密なつながりの相関図〉を見つめることを導いた。

そうした「対話」を通じた〈個人間の親密なつながりの相関図〉内部における個人的アイデンティティの振り返りと自らの境遇や歴史への着目は、日本人メンバーが、在日朝鮮人メンバーとの間にある〈断絶〉を社会的境遇や歴史を含めた非対称な相違にまで拡張して理解することを可能にした。続けてCさんは述べる。

「在日〔朝鮮人〕の……皆さんは差別される側に立たされがちなマイノリティーです。しかし、一方で、彼らの中にも権力関係は、様々な形で必然的に存在します。国家権力の政策・統制が大きく影を落とともいます。また彼らの多くはごく当たり前のようにな家離散〔＝ディアスポラ〕を経験しています。……「在日〔朝鮮人〕」の人々を考えていくとき、こうした二重三重のしがらみを配慮することが不可避であり、このしがらみは「日本人」であるメンバー（＝私）には残念ながら切実なものではありません。そんな相互の認識のギャップを在日〔朝鮮人〕一世の……言葉と身体を通じて、ありありと理解できた〔聞き取り〕調査であったと思います（C、『通信』16号、2006年2月）。

この記述が示すのは、日本人メンバーのCさんが、〈個人間の親密なつながり〉を有する在日朝鮮人メンバーの置かれた境遇や歴史を彼／彼女の個人的アイデンティティと結び付けて理解することにより、〈個人間の親密なつながりの相関図〉の中に〈断絶〉（「ギャップ」）を位置づけている点である。このことは、共和国や韓国や日本の国家政策の歴史的・現在の影響や、それらに伴うディアスポラの状況、その中で在日朝鮮人メンバーが有する「二重三重のしがらみ」を、単なる知識ではなく〈親密なつながり〉をもつ個人の出来事として、非当事者である多数派の日本人メンバーに理解させることを可能にした。

また日本人メンバーのCさんは、在日朝鮮人メンバー

との間にある〈断絶〉を、〈個人間の親密なつながりの相関図〉における自らとの「限りない「距離」」(C、『通信』4号、1999年9月)とも表現する。その意味でいえば〈断絶〉とは、〈個人間の親密なつながりの相関図〉における在日朝鮮人メンバーと日本人メンバーの境遇と歴史の相違を指している。そしてその相違は日本人メンバーに次の点を自覚させた。Cさんはいう。

在日〔朝鮮人〕という他者……に対峙する時、たとえ特殊性(歴史性)を突き詰めたところに現れる普遍性〔=在日朝鮮人というカテゴリーの一般的内容〕を求めても……回収しきれない……残余する特殊性に舞い戻らざるを得ない位置に〔日本人の〕私は立たされます。要約を徹底的に拒絶する位置といたらよいのでしょうか。それが今回の断絶の経験でもありました。現にどうしようもなく断絶しているという自覚を繰り返し反復していく中で、「絶望と共に少しずつ表れる共にやっていく必要があるという希望」を……思うようになりました(C、『通信』17号、2007年1月20日)。

この記述が示すのは、日本人メンバーが在日朝鮮人メンバーの歴史や境遇を理解しようとする際、それらの知識が在日朝鮮人メンバーの生きられた経験と不可分であるために、厳密な意味でその理解を達成することが不可能な点である。「対話」実践を通じてCさんは、在日朝鮮人メンバーの生きられた経験における境遇や歴史の知識を、相手との〈個人間の親密なつながりの相関図〉に位置づけて理解しよう試みた。しかしそれは、Cさんの個人的アイデンティティを起点とする以上、Cさんの生きられた経験の枠内で相手の生きられた経験を解釈する営みであった。その結果Cさんは、自己と相手の共通項をなす一般的な知識として相手の歴史や境遇を理解することになった。Cさんはその理解の試みを繰り返す中で、相互理解の不可能性という〈断絶〉を相手との〈個人間の親密なつながりの相関図〉に位置づけ、その上で「対話」実践に次の価値を見いだした。それは——Cさんが相手に「接近しようとする」(C、『通信』4号、1999年9月)と述べるような——在日朝鮮人メンバーと日本人メンバーとの相互理解の不可能性を前提として相互承認を目指すという価値と、「対話」実践の完遂なき継続という価値である。つまりパラムにおいて「対話」とは、在日朝鮮人メンバーと日本人メンバーが互いに「分かり合えない」前提で相手を知り続けることにより互いに承認しあ

う実践であり、その存続が「共に生きる」ことの内実であった。

## 5. 〈断絶〉を見据える「対話」の意義

Rさんは、この「対話」の意義を「結論を出すというのではなく、それぞれが認識を深めていく」(R、2007年2月17日、集い)と表現する。すなわち、在日朝鮮人－日本人間の〈断絶〉を見据える「対話」実践は、メンバー間の何らかの合意や共通の結論の形成ではなく、個々のメンバーの考えや理解の深化にその意義が求められている。その営みは、〈わがこと化〉と呼ぶことのできる自覚のプロセスであり、2つの構成要素を有していた。ちなみに、筆者の参加観察の経験や収集した資料からいうと、その営みは日本人メンバーに顕著にみられた。以下それらを見ていこう。

### 5-1. 知識の〈わがこと化〉

知識の〈わがこと化〉とは、「対話」実践において得られた在日朝鮮人メンバーの境遇や歴史やそれに付随する社会問題を、日本人メンバーが程度の差はあれ自らの事柄として占有するプロセスである。日本人のKさんとCさんは述べる。

皆さんの話を聞いてる方が多いんですが、良い刺激となって、視野が広がっていきます。〔在日朝鮮人メンバーが抱える〕いろいろな問題を、過去のことや他人事ではなく、自分の問題として考えられるようになりました(K、『通信』18号、2009年2月)。

北朝鮮〔=共和国〕のいわゆる「拉致事件」に絡み、国家権力による市民への……暴力が、メディア……の効果もあって、大きく問題になり、〔その問題に対する〕「日本人」の関心にも強いものがあります。その関心の矛先が「在日韓国・朝鮮人」……への差別という、もう一つの暴力へと向かってしまっている、見過ごすことのできない歪んだ現象もあります(C、『通信』13号、2003年6月1日)。

上段の記述は、日本人メンバーのKさんが、「対話」実践を通じて〈親密なつながり〉を有する在日朝鮮人メンバーが抱える社会問題を、自己と無関連な生まれる前の過去の出来事や他人事ではなく自らの事柄として捉えるようになったことを示している。また下段の記述は、日

本人メンバーのCさんが、「対話」実践を通じて知った在日朝鮮人メンバーの置かれた境遇を、自らが生活する国際関係やマスメディアの影響を含めた〈現代日本社会〉における在日朝鮮人への差別問題として捉えるようになったことを示している。つまり、知識の〈わがこと化〉とは人が、自らの個人的アイデンティティに時間的にも身体的にも無関連な相手が占有する事柄を、相手との〈個人間の親密なつながりの相関図〉の中に位置づけることにより、何らかのやり方や程度において、その事柄についての知識を自らの個人的アイデンティティに関連づける営みである。

知識の〈わがこと化〉は、〈断絶の自覚〉という契機を経ることにより、知識の獲得という規範を生み出していた。日本人メンバーのKさんはいう。

私も〔第二次世界大〕戦後生まれであり、戦争については実感はわからない。しかし〔私も含む〈現代日本社会〉の人びとは〕これまで日本が他国に対してしてきたことは実感が湧かないまでも知らなくてはいけないのではないか（K、2004年1月18日、集い）。

この語りにおいてKさんは、第二次世界大戦を——生まれる前の出来事であるがゆえに——自らの個人的アイデンティティと無関連な事柄と捉えている。しかし「対話」実践において日本人メンバーは、在日朝鮮人メンバーが第二次世界大戦の出来事の影響により現在も少数派や被抑圧の境遇にあることを知ることができた（山口 2011, 2012）。そのためKさんは、「対話」実践を通じて形成された〈個人間の親密なつながりの相関図〉の中に、在日朝鮮人メンバーと比べてその歴史的出来事の「実感が湧かない」という〈断絶〉を位置づけ、その〈断絶〉を超越できないからこそその代わりに第二次世界大戦時における日本と他国との関係の知識を知るべきである、という規範を導きだしている。

## 5-2. 個人的な生き方の〈わがこと化〉

個人的な生き方の〈わがこと化〉とは、「対話」実践において、あるいはそれを通じて相手の生きられた経験と自らの生きられた経験とを比較考量することにより、自らの個人的な生き方を修正ないし変更するプロセスである。それは、相手の個人的アイデンティティのあり方やそれに対する態度を部分的であれ占有するものであり、それゆえ自らの個人的アイデンティティのあり方やそれ

に対する態度を部分的であれ変更させる。これも筆者の参加観察や収集した資料からいうと、日本人メンバーに顕著にみられた。KMさんは述べる。

〔日本人の〕私同様その日初めて参加した〔日本人の〕ITさんが「今日、私はみじめでした。なぜかという〔メンバー〕皆さんのお話を聞いていて、なんて自分はこれまで何も考えずに暮らしてきたのだろうと実感したからです」〔と述べました〕。……〔それは〕彼自身の心のあり方のことで……私も同じ思いました（KM、『通信』1号、1999年1月1日）。

「対話」実践に初めて参加したKMさんとITさんは、メンバーたちの生きられた経験に基づく意見を聞いたとき、自分自身が「何も考えずに暮らしてきた」ことに気づいた。その気づきには、他のメンバーとの比較において生じた自らの生きられた経験に対する「みじめ」という感情の表出が伴っていた。すなわち、〈現代日本社会〉に生きていたKMさんとITさんは、パラムの「対話」実践への参加と自らの「みじめ」という感情の表出を契機として、自らの個人的アイデンティティのあり方（「心のあり方」）に疑問を呈している。

また在日朝鮮人や日本人、あるいは韓国人といった集合的アイデンティティは、「対話」実践においてメンバーたちが表象する個人的アイデンティティのあり方やそれに対する態度に影響を与えていた。そのため両者の間にある〈断絶〉が、個人的な生き方の〈わがこと化〉において重要な契機となった。ITさんは述べる。

「在日韓国人」「在日朝鮮人」「在日韓国・朝鮮人」……「在日コリアン」〔といった呼称は〕……「在日〔朝鮮人〕」本人にとって「自分とは何か」という問いとじかに関わるだけに、問題は極めてデリケートです。〔日本人メンバーにとって〕「対話」は、この「悩み」に愚直にこだわることから始まるような気がします（IT、『通信』8号、2001年2月1日）。

在日朝鮮人の呼称という論題についての「対話」実践を通じて、日本人のITさんは、在日朝鮮人メンバーが抱える呼称問題の切実さに気づいた。それは、その集合的アイデンティティの呼称が（例えば蔑視といった）多数派からのまなざしを受けるがゆえに、あるいは（国籍といった）在日朝鮮人社会内部での相違を表すがゆえに、在日朝鮮人メンバーの個人的アイデンティティに直接影響

を与える点であった。一方で「問題は極めてデリケート」という記述から IT さんは、日本人であるがゆえにその切実さを〈わがこと化〉することが出来ないという〈断絶を自覚〉していることもわかる。その結果 IT さんは——「この「悩み」に愚直にこだわる」というように——その〈断絶を自覚〉した上で、在日朝鮮人メンバーが自らの個人的アイデンティティに向き合う態度を〈わがこと化〉し、その態度を IT さんも含めた日本人メンバーにとって習うべき規範と位置づけている。これは、日本人メンバーが在日朝鮮人メンバーから得た、「対話」実践における個人的アイデンティティに対する態度の変更である。

こうした個人的アイデンティティのあり方やそれに対する態度の修正は、日本人と比べて相対的に在日朝鮮人と類似の境遇や歴史を有するニューカマーの韓国人メンバーと日本人メンバーとの「対話」実践においてもみられた。MH さんは述べる。

〔韓国人メンバーの〕二人は自分の直面した問題や経験などから、しばしば社会の問題に言及されたが、口調は一方面的な非難や激しい口調とは無縁だった。むしろ慎重に、時には戸惑いながら、自分の経験した困難や問題について話された。……二人の慎重な口調は経験に向き合う際の誠実さの証しなのではないだろうか。そしてその慎重さや戸惑いにこそ僕は考えさせられてしまった (MH, 『通信』4号, 1999年9月)。

日本人メンバーの MH さんが気づいたのは、「慎重さ」や「戸惑い」という感情の表出を伴う韓国人メンバーの意見の語り方である。〈現代日本社会〉に生きる MH さんにとって、在日朝鮮人や韓国人の境遇や歴史についての語り方は、日本と朝鮮半島の諸国家との間に横たわる〈ステレオタイプの戦争被害者-加害者関係〉に基づく日本人への非難や、知識人が書いた本の知識に基づいた理不尽な社会問題状況を日本人に強く訴える形式 (山口 2008b, 2012) を想起させた。しかしそうではなく、韓国人メンバーは、「違いを認めて」互いに個人の経験に基づく意見を学びあうという「対話」理念に基づき、自らの生きられた経験を言葉にしていた。MH さんはその気づきから、韓国人メンバーの個人的アイデンティティに向き合う態度を——「僕は考えさせられてしまった」というように——自らの個人的アイデンティティに対する態度とすりあわせ、それを〈わがこと化〉すべき「誠実さ」と評価している。

## 6. むすびにかえて

ここまで〈断絶〉に着目して「対話」実践を描写してきた。本稿は事例報告のため、理論的な一般化は検討の範囲外である。そこで最後に、パラムの「対話」実践の特殊な形態をまとめることにより、本稿の閉めとしたい。

本稿で暗黙裡に示されるのは、パラムの「対話」実践の特殊な形態を構成する、在日朝鮮人メンバーと日本人メンバーとの非対称な関係である。

〈現代日本社会〉においては、多数派の日本人が少数派の在日朝鮮人に対して蔑視や差別を行うという非対称な関係がみられた。また在日朝鮮人が抱える諸論題についてのコミュニケーション経路においては、〈在日朝鮮人としての自己〉の日本人に対する表明がスティグマの告白となる非対称な関係がみられた。特に在日朝鮮人と日本人が同じ東アジア人であるため、在日朝鮮人がスティグマについての具体的な経験や事柄を表明しなければ、日本人にはそれが不可視であった。そして「対話」実践においては、感情の表出をめぐる非対称な関係がみられた。少数派の在日朝鮮人がスティグマを抱える〈傷つきやすい自己〉を表象して意見を述べる時、それに伴う感情が表出されるが、多数派の日本人にはそれが無い<sup>7)</sup>。また、日本人が在日朝鮮人の〈傷つきやすい自己〉を承認するときにはケア活動の側面があるが、在日朝鮮人が日本人の自己を承認するときにはそれが無い。

本稿から分かるのは、在日朝鮮人側にとって〈断絶〉はいわば所与の状態であり<sup>8)</sup>、日本人側にはそれが不可視となる点である。また「対話」実践においても、双方の相互理解の〈断絶〉は超越不可能であった。それゆえ、〈断絶の自覚〉が日本人側にとって重要となった。日本人は、〈断絶〉を見据えた「対話」実践を通じて、在日朝鮮人の歴史や境遇を〈わがこと化〉することができた。すなわち本稿が描いたのは、相互理解の達成を目指すのではなく、〈個人間の親密なつながりの相関図〉に知識や生き方を関連づけることにより相手側の知識や生き方の〈わがこと化〉に至るといふ、在日朝鮮人-日本人間の相互理解の不可能性を前提とした相互承認の一形態である。

加えて「対話」実践における非対称性は、「対話」理念における対等な関係や相互承認という価値との間に緊張を生みだし、それが「対話」実践の倫理の形成に寄与しているようだ。日本人の〈わがこと化〉のプロセスにおいては、「対等になれない中で対等を目指す」という志向

性が、非当事者による当事者の知識の獲得という規範や非当事者が当事者の主題に向き合う際の「愚直さ」、自らの生きられた経験に向き合う態度の「誠実さ」という倫理を生み出している。「対話」実践においては、「相互理解が不可能な中で相互承認を目指す」という志向性が、完遂なき相互承認の継続という非当事者と当事者が「共に生きる」倫理を生み出している。

## 注

- 1) 本稿は「在日朝鮮人」と「日本人」を、国籍の如何を問わず、またコミットメントの程度の差を問わず、それらの民族的アイデンティティ（エスニシティ）を有する人びとという意味で使用する。そう考えると「在日韓人」と表記することもできるが、徐（2003:48）に倣い、在日朝鮮人と表記する。なお本稿における在日朝鮮人は、主に第二次世界大戦後渡日したいわゆるニューカマーではなく、1910年以後日本の地域に住むようになったオールドカマーとその子孫を念頭に置いている。
- 2) 筆者はパラムのメンバーとなり、その活動や運営に参加する中で調査を実施してきた。その意味で本研究は、調査者の主観的経験から独立した「客観的」研究ではないし、対象者への影響を排した「壁の花」的な調査態度もとっていない。
- 3) 事例に表れる用語や概念は「」で括弧で表記した。
- 4) 「集い」とは、月に1-2回開催される2時間程度の定期的集まり、あるいは不定期的集まりであり、「対話」が繰り返される場所である。なお、不定期的集まりには懇親会や反省会等も含めている。
- 5) 本文中の引用では、人物記号、入手年月日、入手場面の順で記した。入手場面の略号は、集い（定期・不定期的集まり）、聞き取り（対象者へのインタビューや対象者との雑談）である。またメンバー向けの手作り雑誌である『パラムせんだい通信』からの引用の場合、『通信』と表記し号数、発行年月の順で記した。
- 6) このコミュニケーション経路は、行為者たちが互いに自己と相手を在日朝鮮人と日本人と自覚している場合の相互行為を指している（山口 2012）。
- 7) ただし、「対話」実践を消失させる〈ステレオタイプとしての加害者-被害者関係〉が両者の間に生起するとき、日本人には謝罪行為に伴う感情の表出がみられた（山口 2012）。
- 8) ただし、パラムを覆う〈現代日本社会〉における若い世代の在日朝鮮人はそれに該当しなかった（山口 2012）。

## 【文献リスト】

徐京植、2003、『秤にかけてはならない』影書房。

Strauss, A.L., and J. Corbin, 1998, *Basics of Qualitative Research 2nd edition*, Sage (= 2004, 操華子・森岡崇訳、『質的研究の基礎 第2版』医学書院)。

———, 2008, *Basics of Qualitative Research 3rd edition*, Sage (=2012, 操華子・森岡崇訳、『質的研究の基礎 第3版』医学書院)。

山口健一、2008a、「文化」表象と「混交」のコミュニケーション論

東北大学大学院情報科学研究科博士論文。

———、2008b、「共生の作法」の経験的研究をめざして『社会学研究』83号、133-155頁。

———、2011、「多様な意見に開かれたコミュニケーションへ」、「福山市立大学開学記念論集」編集委員会編、『都市をデザインする』児島書店、291-312頁。

———、2012、「断絶と「対話」」『都市経営』No.1、63-79頁。

———、2013、「在日朝鮮人-日本人間の〈親密な公共圏〉形成」、松田素二・鄭根植編『コリアン・ディアスポラと東アジア社会』京都大学学術出版会、25-50頁。

## “Dialogue” Confronting “Gaps”: A convivial ethic in the impossibility of mutual understandings between *Zainichi*-Koreans and Japanese

Ken'ichi YAMAGUCHI

This paper describes a specific form and ethic of “dialogue” with “gaps” between *Zainichi*-Koreans and Japanese in the case of *Param* Sendai. The “dialogue” is a practice that *Zainichi*-Korean and Japanese members express and learn their personal opinions based on their lived experiences. The “gaps” refers to the differences of standpoints and mutual misunderstandings in the “dialogue.”

Awareness of the “gaps” is very important for Japanese members to perform the “dialogue”. A Japanese member can possess a Korean member’s personal historical circumstances as “my matters” through the “dialogue” confronting the “gaps”. It can be a self-identification process with others in the impossibility of mutual understandings. The practice is a specific form of mutual recognition under the impossible condition of mutual understandings between *Zainichi*-Koreans and Japanese. This form also gives the “dialogue” a convivial ethic of its never ending continual performance as mutual recognitions between the persons concerned and unconcerned.

Keywords : “dialogue”, awareness of the “gaps”, self-identification with others, mutual recognitions, a convivial ethic